哲學研究　第三百號

教育的現實（承前）

——教育哲學基礎論——

森　昭

(四) 結合社會——自立的個人性

生命の生成發展進歩は直線的連續的なる流動ではなくして、却つてその都度特定の形態に結實し、而も究極的には絶對に對して呼應卽相反的である所の生命の本質構造に基いて、それ等特定の形態が反面に持たざるを得ぬ疎外性に纏綿阻害されながら、猶同時にこの疎外性を絶對否定的に突破して却つてこれをより高次なる生成發展進歩の媒介基底に轉じつつ、次元飛躍的にその運動を持續し行くものである。今や我々は再び生命の新たなる飛躍的發展進歩の運動が展開されんとする境位に立つて居る。この新しき運動の形態を充全に把捉し、又それが生命の全體的運動に於いて持つ意義を完全に自覺するために、我々は今までに展開された限りの生命の運動を振り返る事が必要である。人間的現實に於ける根源的實在と言ふ可き種的生命的基體は、絶對に對し相反卽呼應的なる生命の生成發展に於ける、疎外卽媒介的なる自己形成運動の自然的直接的なる所產形態であり、從つて生命の生成發展進歩の運動の根源的實在基體たると同時に、却つて自然的生命の物體依存性に基いて特殊的なる自己自身に於いて閉鎖的共同體を形成し、これ

が自己同一の保持を自己の目的として僭取し、全體的生命の運動から自己疎外せんとする、と言ふ自己矛盾的本性を持つものである。然し種的生命的基體がその自己矛盾性の故に必然に陷る分裂的狀況の底から自己を貫徹し來る全體的生命は、個體の前個體的生命基底に埋沒吸收されたる個體性の意識化的顯勢化を媒介としつつ、個體の環境に對する意識媒介的なる勞働的行動聯關を通じて、高次の生成發展を持續せんとする。この新たなる生命の運動の自己形成態たる生活共同體は、ここに成立する意識的個體性の原初性の故に、却つて超個體的種的なる集團意識の成立を結果して、以て內に於いては個體性の發達伸長を抑壓し外に對しては諸他共同體と否定的に對立すると言ふ、二重の意味で疎外的なるものとならざるを得ない。然しこの疎外性の裏には直ちに媒介的なる生命が、個體の勞働を通じてその生成發展の運動を次元飛躍的に持續せんと緊迫して居るのである。生活共同體のかかる疎外性と媒介性との自己矛盾は、勞働經驗の發達に伴ふ個體性の伸長と、これに相關する集團意識の强制力の自覺的强化との故に、益〻深刻なるものとならざるを得ない。生活共同體從つて又種的共同體は、斯の如き緊張せる自己矛盾を懷きつつ、これに基き必然に惹起される共同體の發展變化と相關して漸次具體化され來る歷史的世界の端緒的段階の、特殊なる構成主體としてこの歷史的世界に登場するに至るのである。而して歷史的世界への登場は卽ち諸他共同體との積極的接觸交涉に外ならない。寧ろ諸他共同體との接觸交涉が歷史的世界の具體化更にそれと相卽して共同體の歷史的主體化を必然ならしめる、と逆に言ふ事も出來る。卽ち兩者の間には原因と結果との區別を明確に容れ得ざる交互規定的聯關が存立し、實はこの聯關の全體そのものの具體化として、一方に歷史的世界の具體化他方に共同體相互の接觸交涉の具體化が考へられるのである。かかる意味に於ける歷史の具體化と共に、種的共同體の內的自己矛盾は對外關係と媒介され

て一層對自化され益〻激化されるに至るであらう

諸他共同體との接觸交渉に於いて特に重要なる役割を果すのが一般に交易と鬪爭である。共同體に於ける諸個體の勞働を通じてその生成發展の運動を持續する生命は、當然又共同體の經濟的生活を發展分化せしめるものであるが、共同體の免れ難き地域的閉鎖性に基く有限なる資源は、やがてこの發展を完全に支へ得ざるに至る事は必然なるが故に、共同體はつひにその閉鎖的限界を超えて諸他共同體との間に資源の交換を開始せざるを得ないであらう。ここに共同體相互の交易は成立するのであるが、共同體の人口增加もこの有力なる原因たる事は否定出來ない。交易は初め恐らく物々交換の形式に由り、やがては更に複雜多岐なる方法に由つて、遂行されるであらうが、兎も角交易は、自己の共同體の封鎖性を破つてその外に他の共同體が多數存在する事を具體的に經驗せしむるものであり、加之共同體の成員諸個體をして自己はその共同體に內屬すると共に、同時に更に自己共同體を超えて他の諸共同體をも含む如き世界史的世界に於いてあるものなる事を、具體的に自覺せしめるであらう。かかる經驗と自覺とはやがて共同體の成員をして、自己の共同體への內屬が必ずしも不動絕對のものではなく、却つて內屬關係からの離脫も實は可能なる事を感得せしめずには措かないであらう。特に交易の進展に伴ひ、その普遍的超共同體的媒介手段たる貨幣が成立し、交易を專門とする特定の個人卽ち商人が出現するに及んで、個體と共同的との自然的必然的なる聯關は、共同體を超えて動く貨幣と財貨に由つて或は稀薄化され或は切斷せられるに至るであらう。貨幣財貨の超共同體的なる流通的媒介性は、同時にそれらが、共同體に於いて漸く種的に固定されるに至る身分をも超えて機能する事と、相關し、從つて對外的交易の進展と對內的交換の發達とは相互聯關する。交換は原初的には共同體そのものの內部的必要に基いて

成立するであらうが、原初的交換關係に已に潜在する個體と個體との關係は、やがて交換の發達と伴つて漸次對自化され、遂には交換關係を支へるものは共同體の必要でなくして却つて個人の私的要求たるに至る、內的必然性がある。かくて交易——交換の進展發達が共同體からの個人分立の傾向を增大する事必然である。

次に、平和的なる互讓性を本性とする交易を以てしては最早充足され得ざる程度に、共同體の經濟が發展分化するに至る時、屢〻土地の擴大・自然資源の獲得・奴隷の收取等を目的とする鬪爭が非常の手段として惹起されざるを得ないであらう。勿論かかる經濟的原因によらざる、例へば人間の征服意欲に由來する鬪爭もあらうが、兎に角共同體相互の間に於いて鬪爭が極めて頻繁なる事件である事は事實の示す所であり、絕對に對する種的疎外性を不可避的一面として持つ種的共同體相互の、自己維持及び自己擴大の運動に於いて必然に惹起されざるを得ぬ歷史的出來事であり、歷史の主たる內容が共同體相互の鬪爭なりと言ふも過言ではないであらう。さて一般に鬪爭は共同體が外部と强力に抗爭し得るために、共同體の內部的統一の强化を要求する。所が鬪爭に於いてこの內部的統一を强固に確立する特定の指導者の出現する機會が與へられる時、更に又指導者ならぬ他の諸個體にも鬪爭に於ける功績等に由つて共同體內に於ける優越せる地位が與へられる時、成員個體間の種的身分的秩序は動搖を來し、個體の性能力量等に相應する新しい社會秩序が成立する可能性が急激に增大する事は明白である。特に自己の共同體が鬪爭に勝利して他の共同體の成員を奴隷として收取する時、或は逆に自己の共同體が敗北して成員が他の共同體に奴隷として攝取される時、共同體に於ける個體の內屬關係・身分秩序が攪亂され動搖を來す事當然であり、個體が共同體から分立する傾向が益〻激化されるに至る事必然である。これが唯一の原因ではないにしても、同時に又ここに共同體の內部に支配と被支配との

政治關係の成立する機會も有力に與へられるのであつて、若し政治が單なる强力のみに由つて遂行される場合、强力なる支配者が權力意志を以て共同體を自己に奪取し被支配成員を自己の主我的目的に奉仕せしめんとする事もあり得るであらう。

嚮に詳述せる如き共同體の內的自己矛盾に基く個體の分立は漸進的であり、從つてそれ丈けでは共同體の分裂崩壞は決定的であり得ず、却つて更に歷史的世界に於いて、諸他共同體との交易といふ平和的交涉と特に鬪爭といふ非常的交涉とを通じて、初めて共同體の種的秩序は根柢より攪亂され個體分立の傾向は激化され、以て共同體の分裂崩壞は急激に行はれるであらう。ここに我々は共同體の深き自己矛盾を見る。共同體の從つて又これをその自己形成體とする種的生命の自己維持・自己擴大の必然的要求に動機付けられて成立する交易と鬪爭とは、却つて實は共同體の崩壞を結果し種的生命の自己分裂を將來する。而してここに我々は生命の生成發展進步の運動に於ける重大なる轉換・世界形成の活動に於ける著しき飛躍の起る事を發見するであらう。前歷史的段階に於いては前個體的基體的生命の生成發展があらゆる現象や行動を根柢から支へ、その都度他面に成立つ疎外をも猶否定的に突破する生命の基體的推進があつた。然し推進的生命基體がその形成する共同體を歷史的世界に登場せしめた時、或はその共同體の發展と共に歷史的世界を成立せしめた時、却つて共同體は歷史的世界に支配する超共同體的普遍的法則に働かれてそれ自體に止住停滯する事が出來ず、單なる自然的直接的なる種的共同體としては崩壞せざるを得ぬに至り、これと相關して種的生命も單なる直接的自然態に於いてあるものとしては分裂せざるを得なくなるのである。卽ち今や生命は全ての現象・存在・生活の實體的基底としてその自らなる生成發展の運動を、前段階と同樣には持續し得ざるに至つたのであ

る。然も猶生命はその運動を持續せんとする。生命は生成發展進歩せんとする不撓の衝動であり意志である。前歴史的段階に於いては全體的生命の自己形成體たる種的生命的基體――種的共同體が全體的生命に動かされつつ、その生成發展を支へ擔つて居た。今やこれが分裂し崩壞せんとして居る。全體的生命はかくてこの分裂崩壞の中から分立し來る個人の自覺的勞働を通じて、その發展進歩の運動を持續せんとするのである。かくて生命は自然的・前歴史的生命でなくして却つて歴史的生命に發展轉化するのである。

勞働は、種的生命の環境依存の前個體的聯關が破れ、個體と環境とが對立する特定の缺如的狀態に於いて、種的生命が個體の身體的行動を媒介として自己自身を保存維持せんとする媒介的運動に外ならない。所が勞働の主體たる個人は原初的には種的個人であり、從つて實は種的生命の自己形成體たる種的共同體が勞働の原初的主體なのである。然し原初的勞働に於ける如く、種的身心的個體が直接なる種的生命衝動に從つて、屢〻神話的呪術的なる仕方に由つて、環境自然に直接的變化改造を加へて居る間は、勞働は十分效果的に遂行される事が出來ない。勞働が完全にその目的を達成し得るためには、却つて直接なる種的生命衝動を一度抑壓否定し、以て生命と直接に融卽滲透せる主觀的環境を勞働の對境として客觀化し、その對境自然の客觀的構成を充全に把捉する事が要求されるであらう。環境自然を勞働對境として客觀化する事は、一面外に直接的に向かはんとする種的生命衝動の抑壓否定を要求すると同時に、他面對境の實在的抵抗に出遭つて勞働主體が自己自身の內に向つて反照反省する事なしには行はれ得ないであらう。卽ち自己の直接的生命衝動を客體的に超越する環境を外に客觀的に對境として措定する事は、自己自身の內部に於いて種的生命衝動の直接性を主體的に超越する事との媒介聯關に於いてのみ可能なのである。自己の外への客觀的超越と自己

の內への主體的超越とは本質的に相關し、構造上常に主體卽客觀的なる媒介性を持つ。種的生命衝動の主體的なる內への超越に於いて、先づ意識が成立し從つて又意識的個體性が對自化される事は已に述べた所である。意識は成程環境自然と直接に滲透貫入し合ふ事のない自己の主體的內として成立するものであるが、猶それは環境自然從つて又種的生命衝動と否定的に對立し合ふものではなくして、實は却つて之等との密接なる聯關に於いてあり、從つてそれ自身に於いては直接なる種的共同性から否定的に脫却したものではない。從つて單に斯の如き意識に導かれる勞働は猶卽自的直接的であり、意圖的企畫性・合理的技術性を持ち得ず、達成される所業も亦十分具體的とは言ひ難い事も已に述べた所である。然るに勞働經驗の發達と共に、勞働が漸次神話的呪術的なる直接性から脫却して、道具や機械等を媒介する技術的勞働に進步する時、これと相關して勞働主體たる個體も亦種的生命衝動の卽自性を絕對否定し、又これからの影響制約を免れざる種的共同的意識の對自性を更に否定して、以て環境自然を純粹に對境として客觀化し、これに纏綿する神話的呪術的空想性を完全に捨象し、以てこれが持つ普遍的なる構成秩序を純粹客觀的に認識把捉する事が要求される。逆に又かかる客觀的認識把捉を俟つて道具・機械の發明・使用も可能であり、兩者の間には相互媒介的循環のある事明瞭であらう。さて右の如き環境自然の普遍的秩序認識の主體的能力が外ならぬ理性である。理性は初めから理論的認識能力として自體存在するのではなく、實はかかる勞働の技術性或は技術的勞働を媒介として成立するものなのである。而も理性は、勞働の成立を必然ならしめる種的生命衝動に由つて直接に規定されるものでなく、却つて否定的に對立するものであり、更に生命衝動の種性と密接に聯關する共同的意識に對しても否定的對立性を持ち、一般にかかる自然生命的・身心的基底性から獨立にそれ自身の內部に於いて自己完結的なる自律的普遍體系

を形成せんとするものである。從つて又かかる理性を媒介とする技術的勞働の主體たる個體も亦當然、最早種的生命衝動に必然的に規定される事なく、又共同的集團意識に直接的に制約される事のない、この意味で自立的なる個人であらう事は明白である。

ここに於いて生命は再びその自己矛盾を顯はにせざるを得ないであらう。蓋し生命はその發展進歩の運動を眞に具體的歴史的に持續せんとすれば、自然的直接態或は身心的卽自態に於けるそれ自身には止まり得ず、却つて理性媒介的なる個體の企畫的技術的勞働に由る外ないのであるが、個體は生命より生れ生命的基底なしには生存し得ないものでありながら、猶理性的個人としての限り最早生命の直接的自己限定に由つては限定し盡され得ざる、却つてこれに否定的に對立する自立存在性を持つものなるが故に、自然的乃至身心的生命は自己自身を絶對否定的に否定する事に由つて初めて、その發展進歩の運動を歴史的に持續し得るのである。而して生命のかかる絶對自己否定的轉換を轉換せしめるのは外ならぬ理性媒介的個人性であり、この轉換に於いて個人は生命の單に自然的卽自的なる基體的生成發展の運動を絶對否定的に主體化して、以て自らは理性媒介的勞働の主體となり、生命はこの勞働に於いて理性と否定的に媒介せられたる歴史的生命に次元飛躍的に轉化し、その發展進歩の運動を歴史的に持續するに至る。斯の如き主體として勞働の經驗を進め且つ廣める事と伴つて、個人は次第に外環境自然に對する支配の力を伸長擴大してそれに對する自己の優越を自覚すると同時に、內自己に於いては種的生命衝動及び共同的集團意識の規定制約に對する否定的對立性を高め、これに伴ひ自分の勞働能力・個性的性能の自覚を深めるに至り、以て兩面よりしてその理性媒介的なる自立的個人性を確立するであらう。かる自立的個人性の確立と相關して個人は、自然的・身心的生命の生成

發展に最早直接に身を委ねこれに必然的に規定制約される事なく、却つて生命の直接的卽自的なる生成發展の運動を絶對否定的に自己に奪ひ、以て自己の勞働・行動の基體に轉化し、自己の理性媒介的なる意圖企畫に基いて技術的合理的に勞働し行動する樣になる。ここに至つて世界形成或は現實建設の主體は、自然的卽自的に生成發展する基體的生命そのものではなくして、實は同時に理性媒介的なる個人なのである。自然的生命はかかる個體個人を產むが故に絶對に對して卽自的に呼應するものである。然しそれが次元飛躍的に生成發展して身心的次元を拓き生活共同體に自己を形成した時、ここに成立する集團意識の共同性に由つて却つて個體の個體性を抑壓阻害するものとなるが、絶對に對するかかる疎外性を否定脫却してその呼應性を具體的に發揮し得るためには、絶對に卽自的に呼應する自然的生命に還元復歸する事は最早出來ないのであつて、却つて絶對否定的に自己を歷史化して、個人の勞働を通じて發展進步する歷史的生命に轉化向上する外ないのである。然る時生命は最早單なる種的基體的生命ではあり得ず、同時に常に個的主體的生命でなければならず、かくて生命はその構造上それ自身の中に否定對立を持ちつつ自己同一を保つ所の否定媒介的生命となる事明白である。具體的現實的生命は常に自然的＝歷史的であり・基體的＝主體的であり・更に種的＝個的である。かかる否定媒介的生命の生成發展進步が歷史的社會的現實を隅々まで漲り渡して居るのである。

さて右の如く勞働經驗の發達進步と相關する自立的個人性の確立は、單にそれ丈けのものとしてはあり得ず、實は同時に客觀的社會性と必然的なる媒介關係にあるものなる事は、物と人との勞働關係が同時に人と人との社會關係と否定的に媒介される事を本質とする人間的現實の本質的構造よりして、當然推測される所である。人間的現實に於いては、物と人との勞働關係に基底付けられざる人と人との社會關係の存立し得ざると同じく、人と人との社會關係に

逆に規定制約されざる物と人との勞働關係は實在しないのである。兩關係は相互に他より因果的に誘導されざる固有性を持ち、この意味に於いて否定的に對立しながら、同時に相互に媒介せられて循環的聯關を形成する。さて共同體に於ける原初的勞働の主體は個人でなくして寧ろ種的共同體そのものであると言ふ事が出來る。ここに於いては生産と消費との主體が具體的に分化する事がなく、却つて共同體そのものがこれの自己同一的主體に外ならない。勿論實際に生産し消費する具體的主體は個體なのであるが、生産と消費とを契機とする勞働の體系が種的自同的なる目的論的構造聯關を構成し、自足完了的なる自同體系を形成して居るが故に、個體が自己目的的にはたらく餘地がなく又その必要も少いであらう。然しかかる共同體的勞働體系の自足完了的自同性は、一般に資源の有限性・人口の增殖等の經濟的或は前經濟的なる諸原因に由り破綻せざるを得ず、以て諸他共同體との資源の交換卽ち交易を開始し、更には成員の收取を目的とする鬪爭を惹起するに至ると共に、他方この事と相卽して發展する勞働の組織的分化に伴つて、生産の主體と消費の主體との同一性は保持され得ざるに至り、以て原初的勞働の目的論的構造聯關が破綻して、ここに生産と消費とを媒介する交換が成立せざるを得ないであらう。交換はその本質的構造上、物と夫々生産的及び消費的に關係し合ふ所の人と人とを媒介する行動として、本來的に社會的なる關係として遂行される人間的行動の一形態に外ならない。勿論個人は初めから自立的に存立するのではなくて實はその原初段階に於いては種的個體にすぎざる事と聯關して、交換も初めから個人と個人との關係として遂行されるのではなくして、實は團體たる共同體相互の關係として從つて交易といふ形態に於いて遂行されるのである。所が嘗に述べた樣に、諸他共同體との平和的交易或は非常的鬪爭は本質上、自己共同體と諸他共同體とを客觀的に接觸交涉せしめると共に、之等共同體を超えつつ同時に包む

所の歴史的世界を現成せしめるものである。從つて一度び、共同體の主觀的なる偶然的恣意に纏綿される鬪爭によつて諸他共同體との交渉が開かれて、共同體相互の間に交易が繰返し遂行せられるに至る時、これと相卽して現成する客觀的なる歴史的世界の普遍的世界性に由つて、逆に諸共同體及び之等相互の關係としての交易が規制され維持せられて、以て鬪爭により開かれる原初的交易に纏綿する偶然的主觀的恣意性が漸次捨象され、交易は普遍的客觀的なる世界性を獲得する樣になるであらう。これは他面より見れば共同體が世界に於いては却つて個體たる性格を帶びて來る事であり、同時に共同體相互の關係としての交易が個人相互の關係たる交換の本質的機能を發揮し來る事に外ならない。一般に共同體の諸他共同體に對する對外的關係は同時に共同體自體に於ける對內的關係と相卽するが故に、共同體間の交易の進展發達は同時に共同體內の交換の發展進歩と相互媒介的聯關を形成するであらう事は、明白にして疑を容れない。而してかかる相互媒介的聯關を現實に擔ふ具體的存在者は卽ち商人に外ならない。勿論交易乃至交換の形態の變遷と相關して、商人の形態も亦種々異るであらうが、その形態の如何に拘らず商人は一般に、交換の主體を相互に媒介するものとして、相互に共通なる中性的普遍性を體現し、理性的な世界人たる性格を本質的に具有する。從つて商人はその本質上中性的理性的なる普遍的世界性に規制されこれに依つて行動する個人なるが故に、共同體の種的なる集團意識に由り規定される事なく、却つてこれに否定的に對立する私的自己目的的個人に外ならない。かかる世界人的商人の成立する事は、一方共同體內部の勞働が分化し分業的組織が發達して、以て人と人との關係が種的秩序から結合社會的組織に轉化發展する事を意味すると共に、他方共同體の成員個體が商人と同じく世界人的なる私的自己目的的個人に發達轉化する事と密接に相關する。而して一般個人の斯の如き私人化を基底付けるものとして、對

外的交易の進展と相關的に發展する集團內部の交換の經驗が有力に働く。交換經驗の發展は本質上、原初的交換に纏綿する主觀的偶然的恣意性を漸次捨象して行き、共通なる交換手段としての貨幣を媒介し、更には普遍的法的なる契約關係を通じて交換を遂行するに至る。蓋し交換はその本質上交換主體の自由平等を前提し、これに基いて遂行される時强奪と區別されるその本來的機能を發揮し得るものであるが、原初的交換に於いてはその本來的機能は卽自的に潛在し歪められた形で發揮されるにすぎないであらうが、交換經驗の發達は漸次この機能を本來の形に於いて對自化し、卽自的に前提された交換主體の自由平等を却つて對自的に歸結されるであらう。交換のかかる轉化的發達を媒介するのが、個人相互の契約關係に外ならない。契約は對自化されたる個人の自由平等を前提しこれに基底付けられて初めて成立するものなるが故に、契約關係を媒介するのは最早共同體の種的秩序ではなく、實は普遍的法的なる交換理性乃至契約理性であり、從つて又契約の主體は種的集團意識に由り規定される事なく、却つてこれから否定的に分立し自己自身に於いて自己目的的に生きる所の理性的私人に外ならない。要するに交換——契約に於いては私的個人相互が關係交渉し合ふのであり、又かかる關係交渉を通じて個人は自由平等なる私的個人として益〻純化されて行くのである。

以上論考する所は要するに、共同體の內外に於ける結合社會への發展轉化の理論的追跡に外ならないが、右には特に自立的個人——私的個人の發達成立の側面よりこれを考察把捉せんと試みたのである。而も右の考察は二つの方向から行はれた。卽ち先づ物と人との勞働關係の方向から種的(共同體的)個體の自立的(結合社會的)個人への發達向上が追跡され、次に人と人との社會關係たる交換關係の方向から種的(共同體的)秩序より分立する自由平等なる私的

（結合社會的）個人の成立發達が論究され、而も兩方向は相反對立する固有性を有しながら相互に媒介されるものであり、從つて兩者は現實的には明確な區別を容れざる循環的聯關を形成する。斯の如く兩方向が相反的固有性を有しながら同時に相互媒介的循環聯關を形成すると云ふ事が、實は人間的現實の存在論的本質構造の、特に今論考しつつある勞働的・理性的なる結合社會的存在次元に於ける、一つの顯現に外ならないのではないか。右に詳述せる如く、物と人との勞働關係の具體化といふ事は、これを存在論的本質にまで遡源すれば、結局物を否定的に媒介しての人間的生命の歷史的發展進歩に外ならず、勞働を通じて人間的生命は個的に主體化され歷史的に發展進歩するのであるが故に、我々は物と人との勞働關係を特に人間的生命の個的主體化的なる歷史的發展進歩の方向に位置付ける事が出來るであらう。これに對して人と人との交換關係は言ふ迄もなく人間相互の社會關係の一形態に外ならず、若し絶對が人間相互の關係の裡に初めて具體的に現成すると考へるならば、この交換關係は少くもその構造からすれば絶對の現成といふ方向に位置付けらる可きものと言はねばならぬ。然し結合社會の次元に於いて特に顯著なる人と人との關係である交換關係は、彌の共同體の次元に於ける人と人との關係たる人倫態の如く、端的に絶對の現成たる意味を持ち絶對に內面的に根源するとは恐らく考へ得られぬであらう。却つて寧ろ交換の主體は種的人倫的秩序に規制される事なく、實は契約的理性に從ふ所の私的個人なるが故に、交換主體は相互に全人的人倫的に關係し合ふのではなくて、却つて理知的契約的に接觸し合ふに止まり、契約的理性の命ずる所人倫に背反するも敢て意に介せざるに至るであらう。この意味に於いて交換關係は正しく人倫の否定態たる意味を持つと言ふ事も出來ないではない。この事は交換關係が絶對の端的なる現成ではなくして、却つて實は前にも觸れた樣に勞働經驗の具體化的發展に於いて勞働に由り基底付けられ

つつ成立するものであり、從つて交換關係の具體的根源は絶對にではなく寧ろ生命の勞働的具體化に於いて求められねばならぬ、といふ事に由來する事なのではないか。所が前述せる如く勞働を通じて人間的生命が歴史的に發展進歩せんとする時、生命は共同體の種的秩序を否定的に突破し共同體の卽自的人倫態から背反分立せざるを得ないが故に、生命の勞働的歴史化に根源する交換關係がこの限り人倫の否定態といふ意味を持つ事は寧ろ當然と言はねばならぬ。然しそれにも拘らず交換關係が人と人との關係たる事は否定出來ぬ事實であり、この人と人との關係たる面に關する限り、それは生命の歴史的なる個的主體化的發展進歩といふ事からは充全に導出されず又完全に基底付けられない事も亦疑ひ得ない事實ではないか。却つて寧ろ交換關係に於いては生命の個的主體化といふ事が制限され否定されて、普遍的合理的理性關係に隨順せざるを得ぬ面のある事も蔽ひ難い事である。この面に關する限り交換關係は必ずしも一義的に人倫の否定態と言ふ事が出來ず、飽く迄人倫の一形態たる意味を荷ひ得ると言はねばならぬ。然しそれを充全なる意味に於ける人倫と言ふ事は出來ず、前述の如くそれが人倫の否定態たる意味を持つ事も亦否定出來ない。從つて交換關係は抽象的人倫關係であり、生命の勞働的發展進歩によつてのみ具體的に基底付けられる所の、それ自體に於いては抽象的なる絶對の現成態と言ふ外ないであらう。要するに交換關係は人間的生命の勞働的歴史化といふ事のみからは充全に導出されず、却つて人倫の一形態たる意味を持ち、從つてそれに對しては相反對立する面を持ちながら、猶他面生命の勞働經驗に基底付けられこれと否定的に媒介され、以て一つの具體的なる結合社會的社會存在を構成して居るのである。ここに我々は相反疎外的絶對——生命が一つの呼應的媒介關係を形成して居る事を見るのである。然し結合社會はあくまで人間的生命の勞働を通じての歴史的發展進歩が基底的樞軸的であつて、絶對はこれに

基底付けられた限りに於いて現成するに止まるが故に、後の論述を俟つまでもなく、結合社會が絶對――生命の絶對媒介的現實體と言ふ事の出來ぬ事は已に明白であらうと思ふ。

さて物と人との勞働關係と人と人との交換關係とが相互に否定的に媒介されて、以て具體的なる社會存在を構成するためには、兩者の媒介關係そのものが言はば存在化され實體化されて、一つの具象的なる存在體になるといふ事がなければならない。然して兩者の媒介關係の實體化されたものが卽ち所有であると考へる事が出來るのではないか。結合社會は單に物と人との勞働關係そのものとして丈けでも、又自立的理性的なる私人相互の交換關係として丈けでも考へられず、同時に兩者の媒介的綜合體たる所有を本質的なる構成契機とするものである。實體的なる所有の成立と共に結合社會は完全なる姿で確立される。勿論所有は結合社會に固有なるものではなくして、已に共同體に於いて存立するものである。所が共同體的人倫に於いては一般に物と人との關係と人と人との關係が融卽的聯關を形成する事と相關して、所有に關しても亦、用益の權能は成員個體に屬し支配の權能は全體集團に屬しつつ、同時に融卽的聯關を形成してをり、從つて全面的に所有權が共同體に否定的に對立する私的個人に歸屬する事はないであらう。然し共同體一般に潜む全面的矛盾は所有に關しても顯現し、所有に於ける右の融卽聯關はやがて破綻するに至るであらう。この破綻を基底的に推進するものはここでも矢張り個體の勞働經驗の發展進歩に外ならない。勞働は物を否定的に媒介する人間的生命の主體化的發展であるが、他面より見れば物に對する人間の征服支配力の具體的發現に外ならない。卽ち人間は勞働の經驗を通じてその自立的個人性を內面的に自覺すると共に、他方物に對する征服支配の力を對物的に自覺する。この內面的自覺と對物的自覺とはその成立基底たる勞働體驗そのものの內面に於いては、本質的

なる相互聯關を形成するが、それにも拘らず一つは內面的であり他は對物的であつてその發展方向が相反する事も否定出來ない。事實又人間の內面に於ける個的主體的自覺が、その成立基底たる勞働體驗より離れてそれ自體に於いて無限に深化されて行く事が可能であると同樣に、他方人間の物に對する支配優越の自覺も、人間の內面的個的自覺とは無關係に、外物に向つて一方的に無際限に擴げられて行く事も屢、あると言はねばならぬ。人間の內面的自覺と對物的自覺とが本質的に聯關して居る限り、物の所有は同時に人格の擴大であり、人格の定在であり、人格的自由の外的領域たる意味を持ち得るでもあらう。然し所有が人間の內面的自覺と無關係に、それ自體に於いて一方的に物の占有支配として無際限に擴大されるならば、所有は最早人格や自由との內面的聯關を失ひ、人倫を無視せる私的自己の自己目的的なる意欲充足の手段に轉ぜられるに至る事必然である。要する勞働經驗の發展進步を通じて共同體より自立し來つた結合社會的個人は、實現し得可き二つの可能性を懷いて居ると言はねばならぬ。卽ち一方に於いてはその內面的自覺を無限に深化してその主體的內奧に於いて對自的絕對と對向するに至り得ると共に、他方に於いては內面への深化を捨てて外物の支配占有卽ち所有の主體として自己を外物に向つて無際限に擴大し得る、可能なる二つの方向を持つのである。

然し人間がその內面的自覺を無限に深化しその主體的內奧から純粹に生き通す事は決して容易でないと共に、かかる方向への深化徹底は却つて人間的現實からの疎外に陷る危險をさへ伴ふ。成程前述の如く個人は自然的基體的生命衝動に否定的に對立する個的主體に發達向上する時、初めて高次の主體的生命存在者たる自立的個人となるのである。然し個人の自立者としての成立そのものが實は、個人がそれに否定的に對立する事に由り自己の自立存在性を確

立す可き當の基體的生命そのものの生成發展に、推進され基底付けられるものであつた。個人はそれの主體的根源と言ふ可き絶對から端的に生誕せる純粋に主體的なる自律者ではなく、却つて絶對に相反對立する面を持つ自然的生命より生れ、様々の疎外態を通過しつつ發達し育成される疎外卽媒介的主體に外ならない。自立的個人成立の裏には、假令彼の主體性に由る勞働の媒介活動を通じてであるとは言へ、猶それ自身を保存維持せんとする自然的基體的なる種的生命の衝動があつた。個人は種的生命のかかる衝動的運動から疎外的に突き出されて自立存在せしめられたと考へる事も出來ないではない。從つて個人の自立はそれ自身の根柢を持つのではなくて、その根柢には實は猶自然的基體的生命が弃騰するのであり、而もこの種的生命が個人自立の根柢でありながら自己矛盾的であつて恒常的根柢たるに堪へざる事に機緣付けられて、個人は自立せざるを得なかつたのである。斯の如く個人の自立性は種的生命の根柢に支へられながらこれに恒常的に依存する事が出來ぬといふ自己矛盾を孕むものであり、從つてその自立性を絶對との主體的媒介に由つて自律性にまで高めるのでなければ、その根柢に弃騰する種的生命の中に呑了される危險に曝されて居るのであり、事實又種的直接的疎外態に轉落する事も屢〻あるのである。然し一度成立した自立的なる理性的個人は、最早無條件に種的生命の疎外性に直接身を渡す事がないであらう。否却つて種的生命の疎外性の中に進んで躍入し、自らも亦疎外的なる主體としてその主我的なる疎外的意欲を充足せんとするであらう。これが卽ち、內面的自覺と本質的に聯關する事のなき外物所有の擴大であり、種的生命的基體の私的占有支配の增大である。自立的なる結合社會的個人は今や外物を更には彼の生命の根源基體をも自己の私的所有の客體に轉ずるに至るのである。所有は根源的には人間の內面的自覺と本質的聯關を持ち、それ自體が直ちに絶對現成に對する疎外者と言ふ事は出來な

いが、內面的自覺と無關係に且つ又人倫關係を無視してこれを無際限に擴大する時、所有はその疎外性を顯在化せしめるであらう。自覺的なる自立的個人は、卽自的に疎外的なる所有客體に自覺的に執着する事により、その疎外性を二重に對自化し、自らも亦二重に深められたる疎外に陷らざるを得ない。個人的であれ社會的であれ樣々の惡はその究極の根源をこの疎外的所有の事實に持つのではないか。

私的所有の無際限なる擴大に狂奔する結合社會的個人の疎外性はこれ丈けに止まるものではない。物に對する人の占有支配たる所有の疎外性は、人と人との社會關係における對立鬪爭の分裂態を必然に現出せしめるであらう。個人の占有支配す可き客體は本來有限であり、極めて多數の個人の無際限なる所有意志を完全に充足する事は不可能なるが故に、ここに多數の個人は客體の占有支配を廻つて激しい對立鬪爭を惹起する事必至である。かかる對立鬪爭が展開されるに及んで、社會はその客體的基體に關すると共に成員主體の關係に關しても、紛亂分裂の狀態に陷らざるを得ないであらう。かくて個體と個體との融卽的なる人倫關係を實現して絕對の卽自的現成態たりし共同體の種的融卽性が破綻し、個人と個人との對立鬪爭の狀況が現出して、絕對はその對自的疎外態に陷らざるを得ないであらう。結合社會は交換關係の側面より見れば自由平等なる個人の合理的理性的組織體であるが、その裏は直ちに所有客體を廻る個人相互の對立鬪爭の分裂態である。結合社會はかかる矛盾的兩面を有する自己矛盾的社會存在である。結合社會的個人は他者の自由を尊重しこれと平等なる理性主體として交換契約する反面に於いて、私的所有意志の充足のためには他者の利害を顧慮する事なく全く自己目的的に行動する。要するに結合社會を絕對の現成といふ觀點より見れば、それは絕對現成的人倫の抽象的實現たると共にそれの否定態であり疎外態である。斯の如く自己矛盾的なる結合

社會を繇つて生命の側より見る時、自然的基體的生命は結合社會的個人の各々に於いて夫々主我的に個人化されて各個人に於いて云はば多數の中心を持つに至るのであるが、各々の主我的中心は相互に相反對立するが故に、生命自體の內部に對立葛藤が醸成され、以て生命の種的根源的融一性は破綻し生命は自らを喰ひ盡して自己壞滅に驀進する、と言ふ事が出來る。從つて生命の歷史的形成體たる結合社會は、却つてその發展進步の極限に於いては生命の自己否定を歸結すると言ひ得るのではないか。然し社會の鬪爭的なる分裂對立が實は個人の所有意志の充足を阻害するものなる事を洞察する理性的結合社會人は、個人相互の利益のために契約的に鬪爭を終熄して相互に融和提携せんとする理性的知慧を忘れないであらう。然し猶私的利益の追求は飽く迄これを保留するが故に、鬪爭の契約的和解は單に私的利益追求の仕方を共同にし得る特定の個人相互の間にのみ成立し得る事は當然である。從つてここに一般に所有意志を共通にする諸個人の結合的集團が、一方に於いては必然的なる經濟法則に裏付けられ、他方に於いては個人各自の選擇意志を媒介にしつつ、成立するのである。かくて結合集團の內部に於いては諸個人の所有意志の契約的融和和解が成立し得るとも、猶集團と集團とは夫々集團的所有意志の相反性の故に飽く迄鬪爭を繰り返すのである以上、個人の絕對に對する疎外性・社會の人倫的分裂性・生命の自己否定性は、否定的に媒介超克されたかの如く見えて實は一層深刻複雜なるものとならざるを得ないであらう。蓋し個體が種的共同體の人倫的秩序から獨立に、彼の私的所有意志に從ひ或は經濟法則的必然に促されつつ、特定の結合社會集團を組織し、以てその私的所有意志を確保しその社會的生存を全うせんとするに至つて、彼の疎外的なる私的意欲はそれの充足の手段として客觀的組織を獲得したのであり、同時に社會の內的對立性は對自的に固定され、生命の自己分裂性は集團の鬪爭として規模を擴大したが故である。結

合社會は勞働に由つて基底付けられ交換により機能化せられ、最後に所有を俟つて實體化せられて完成されるのであるが、所有は却つて同時に結合社會を絶對的分裂態に陷れるものと言ふ事が出來る。

個人が種的共同體の人倫的秩序から獨立に、右の如き結合社會の構成主體となり、以て彼の私的所有を社會組織に由つて確保するに至つて、個人は全き意味の私的個人に轉化したと言ふ事が出來る。共同體的人倫に於いては私的個人性と共同的社會性とが融卽一體をなし、個體の自己の爲めの存在性と集團のための存在性とが相卽聯關し、從つてそれは絶對の卽自的現成態たる意味を持つ。所が個人の自立的成立と相關して共同體が漸次結合社會に發展轉化する時、私的個人性のみが一方的に伸長强化され、反對に共同的社會性は具體的普遍性を失つて抽象普遍的一般性に稀薄化され、私的個人性はこれとの融卽聯關から獨立するに至つて、ここに完全なる私的個人が成立する。而も一度成立せる私的個人はその對物的所有意志を更に對社會的權力意志にまで質的に擴大伸長し、以て單に物件の所有に止まらず人格の支配を敢てするに至る。ここに結合社會に於いて顯著なる事實たる對立的階級の成立根源があるであらう。而して對物的所有意志更には對社會的權力意志に樣々の個人的・社會的惡は根源すると考へる事が出來るのではないか。然し嚮きにも述べた如く外物所有更に權力支配が個人の內面的自覺と本質的聯關を失はず、從つて個人が對物的に擴大せんとする方向と內面的に深化せんとする方向とを、自己自身に於いて主體的に綜合統一して居る間は、外物所有更に權力支配に潛在する個人の疎外性は對自化されず、却つて個人はその疎外性が對自化される可能性を絶對否定して以て絶對現成の媒介基底に轉じ得るであらう。然し結合社會的人間はその全人的存在性を支へる最後の力とも言ふ可き主體的統一性をも喪失して、單なる疎外態の中に沈湎する不可避的危機に曝されて居る事を我々は見逃し得な

いのである。原本的には結合社會は個人の私的支配意志を充足する事を主たる目標として構成されるのであつて、この所有意志が假令疎外的とならうとも猶個人の全人的根源に根差しそれの發動たる意味を持つ限り、社會の組織構成が個人の全人的存立性を危殆に陷れる事はないはずである。所が事實に於いては結合社會は個人の主觀的意志や希望のみに由つて構成組織されるのではなく、同時に必然的なる經濟法則に媒介され基底付けられるのであり、このために個人の主觀性を超脱する客觀的實在性を不可避的に具有し、從つて結合社會は經濟の自律的法則に從つて個人の意志や願望から獨立に發展進歩するといふ面を必然に持つのである。これは究極に於いては人間的生命の物體依存的疎外性に根源するものであるが、今やこの疎外性は高められたるこの存在次元に於いては、單なる消極的阻害としてではなく却つて積極的妨害乃至侵害として個人に襲ひかかるものとなる。卽ち結合社會は個人の意欲實現の手段たる位置から轉じて、好むと好まざるとに拘らず個人の意志を制限し支配し更にはこれを抑壓否定して、遂に個人の全人的存立性を脅す迄に疎外的發展を遂げる內的必然性を具藏すると言はねばならぬ。高度に發展せる特定の結合社會に於いて個人が全人的存立を全うし得ざるに至る事は正に事實の示す所ではないか。全人的存立性を喪失する危險は、他の諸個人の權力意志の支配下に服せしめられる特定の個人に於いて特に著しいであらうが、逆に權力支配する人間は全人的存立性を實現し得るかに見えて、實は却つて勞働的基底より疎外されるのみならず、更に他者の人格を所有すると云ふ人倫的疎外性に陷り、二重の疎外に纏綿される外ないであらう。斯くの如く社會の集團的對立化は又人間の分裂を惹起しその全人的存立を壞滅に導き或はその疎外性を强化する。ここに一般に結合社會的人間の重大なる危機がある。結合社會は人倫の分裂疎外態たると共に、又人間存在の分裂的壞滅を目指して驀進する。然し人間的生命はその主體

化的發展をあくまで歴史の中に持續せねばならず、絶對はその實現者たる人間の全人的實存を確保して人倫に於いて體的に現成せねばならない。然し人間が、主體化的發展に於いて自己否定に陷らんとする生命の基體的統一を回復し、又自己の内奥に自覚される絶對からの召命を實踐に移さんとする時、人間は最早結合社會に於ける單に勞働的・理性的なる自立個人たるには止まり得ないのであつて、より高き社會存在の建設に絶對自己否定的に邁進せねばならぬのである。ここに結合社會がそれ自身の次元に止まり得ざる歴史的・人倫的根據ありと云ふ事が出來る。

種的共同體に於いて集團意識の種的閉鎖性に由りその生成發展を阻害された基體的生命が、理性媒介的個人の勞働經驗を通じてその阻害的閉鎖を否定的に突破して主體的生命に轉化發展して、以て結合社會を形成してその歴史的發展進歩を持續する時、却つてその極限に於いては社會の人倫的疎外・人間の全人的存立性の喪失を歸結して、歴史的生命は自己否定に陷らざるを得ない。ここに人間的生命の深き自己矛盾がある。共同體から結合社會への發展轉化は避けんとして避け得ざる歴史的必然であり、而も亦この事は人間的生命の生成發展進歩と本質的に聯關するものである。然し人間的生命がその歴史的發展進歩を持續する極限に於いては、却つて結合社會の自己分裂と共にそれは自己否定に陷る外ない。人間的生命は悲劇的運命を荷ふ。所が現實の人間は單なる自然生命的存在者として云はば裸のままで生れ出るのではなくて、實はかかる自己矛盾を藏し悲劇的運命を荷ふ人間的生命の歴史的形成體たる社會的現實の中に産み落されたのであり、而もその中に否應なしに生き拔く可く使命付けられて居る。勿論社會的現實の自己矛盾性は、その中に産み落される個人が全面的に背負はなければならぬ責任ではないであらう。それは寧ろ人間的生命そのものが運命的に荷はされて居る所のものである。然しさればこそ、假令社會的現實の自己矛盾性が自らの責任ではないと

しても猶それが人間的生命の不可避的運命でありとすれば、人間としての自己を眞實に生きんとする限り、この矛盾性を自らの矛盾性と感じ、以て矛盾性の構造を尽りなく剔抉すると共に、更にその矛盾性の中に藏せらるる不滅的契機を保存止揚して人間的現實のより高き建設の媒介に轉ず可く努めねばならぬであらう。我々は現實を離れて理想的世界を抽象的に建設する事は出來ない。我々がそこに産み落され投げ出されて居る現實を外ならぬ我々の現實として痛感し、以て我々自身の手を以て變革改善する外に、我々が人間的生命を眞實に生き拔く道はないのである。缺陷の裏は却つて長所であり矛盾を謙せば却つてより高き肯定に轉ずるといふ事の洞察が、現實認識に要求される根本的態度なのではないか。勿論かかる洞察は單に觀想の事柄ではなくして、却つて鬪爭をも辭せない實踐を通じて初めて實あらしめられるものである。かかる洞察に觀想的に停滯する限り猶我々は抽象的なる現狀維持者との同列に頽落し、歷史の發展進歩の阻害者となる外ないであらう。然し矛盾缺陷のみに注目して反面の長所をより高き立場より肯定する事なく、單に現狀の革新のみを口にする事も亦、實は歷史の發展進歩を無視する事に外ならない。過去の人間的生命が永き歷史的營爲により達成した發展進歩は感謝の心を以て飽く迄これを保存せねばならぬ。人間の歷史的發展進歩の不可缺的基底をなした結合社會に於いてその自己矛盾性にも拘らず、人間的生命は甚大なる發展進歩を遂げたのである。

結合社會の構成者たる個人の本質的特質は卽ちその自立的個人性にある。卽ち共同體の種的秩序一般に由つて必然的に規定される事なく、却つてこれからの否定的分立に於いて、自分自身の個的主體性を以て勞働し行動する所に、結合社會的個人はその本來的在方を發揮する。この自立的個人性の確立と共に、充實せる意味に於ける人間的歷史の地平は拓かれたのである。而して自立的個人性が勞働經驗を通じて確立されるものなる事は嘗に詳述した所である。

所が勞働經驗は相互に本質的に聯關しつつ同時に方向的に相反する所の二面を持つものであつた。卽ち勞働經驗を通じて人間は內面的自覺を深化すると共に對物的自覺を擴大する。自立的個人性も亦この兩面と相關的に二つの方向を內具する。卽ち自己の內面に於いて無限に深化され得ると共に、外物に向つて無際限に擴大され得る。自立的個人性が外物所有の無際限なる擴大の方向に發展伸長される時、人倫との相剋を生じ究極に於いては社會を絕對的對立に陷れ又人間の全人的存立性を脅すに至ると共に、それ自身も勞働經驗の基底から遊離し外物を支配するのでなくて外物に依存するものとなり、生命の眞實なる發展進步より疎外されて自己壞滅に陷る外ない。されば眞實の自立的個人性はその成立の基底たる勞働經驗に不斷に否定的に媒介され、外物所有の方向に一方的に伸長される事なく、人間の內面的自覺との密接な聯關に於いて確立されねばならぬ。勞働經驗は旣述の如く兩面を具へるものであるが、之等兩面は勞働體驗の本質的內面に於いて未分的に融合する。この本質的內面とは卽ち種的生命衞動の個的主體的なる絕對否定作用に外ならない。この絕對否定作用の否定的斷面として理性が作用するのであり、理性的否定作用の主體が本來的意味に於ける自立的個人に外ならない。理性と自立的個人性とは內面的本質的聯關をなし、理性の自律的否定作用なき所に自立する個人性はなく、個人の自立は理性に由る否定的媒介作用に於いて發揮される。理性の本質は先づ種的生命衞動及びこれと融卽滲透する環境自然に對する否定の作用として發動する。かかる種的直接的なるものに對する否定作用なき所に理性の本質的機能が發揮される事はない。然し理性の機能は種的直接者の單純なる否定作用ではない。實は寧ろ種的直接者が不可避的に纏綿される所の偶然的特殊性に對する否定作用であり、同時に更に偶然的特殊性の否定の裏に洞察觀照される必然的普遍者の把捉能力である。從つて理性は消極的には偶然的特殊に對する否定の

作用であり積極的には必然的普遍を把捉する能力に外ならない。さて理性の積極的作用に由つて觀照把捉された必然的普遍は、既に論理性の或は理論的理性卽ち悟性の領域に屬するものであるが、理性に由り否定される偶然的特殊は純粹に論理性の領域に屬するものではなくして、同時に實在的に存在するものである。從つて偶然的特殊に對する否定は單なる觀念的否定でなくして實在的否定でなければならぬ。所が理性は自らの作用のみに由つて實在的否定を遂行するといふ事は出來ない。實在的否定は、理性そのものではなくして實は勞働經驗に於ける人間的生命の種的生命衝動及び環境自然に對する實在的否定對立に於いて基底付けられるのであり、理性も實はこの實在的否定對立に卽しつつその否定作用を遂行するのである。斯の如く理性の否定作用は生命の勞働的否定作用に相卽しつつ遂行されるのであるが、一度かくして否定作用の主體たる理性が對自的に成立するに至る時、理性は同時に積極的に必然的普遍の把捉能力として機能し始め、實在的に否定されたる偶然的特殊を觀念的否定の對象に轉じ觀念的に把捉し盡されるかの如くに取扱ひ、以て實在的特殊を論理的特殊に包攝される論理的特殊となし、理性自らは論理的普遍の體系に自己を組織する。ここに理論理性の體系は成立すると考へる事が出來る。斯の如く理性が全ての偶然的特殊を論理的に包攝する必然的普遍の體系として自己自身を組織する時、理性は最早偶然的特殊に由つては制約規定される事のない自律性を確立する。自律性が理性の事實卽當爲であり、理性は特殊を自律的に否定卽包攝するその都度純粹なる自律的普遍體系を實現す可く機能する。而して事實卽當爲的に自律的である理性が卽ち科學――少くも自然科學の形成主體であると言ふ事が出來る。要するに理性的作用性が自立的個人性の本質的內實であり、從つて又理性的自律が自立的個人の理想なるが故に、自立的個人は自己を理性的自律的個人に純化向上せしめんとする。

然し自立的個人が自律的個人に純化向上し得るためには、單に物と人との關係たる勞働の經驗に於ける內面的自覺性の深化に由つてのみでなく、更に人と人との關係たる交換の經驗を基底としつつその私的個人性を確立する事を媒介せねばならない。蓋し勞働經驗に由り確立されるのは理論理性であり、實踐理性の確立は交換の經驗を俟つて初めて可能なりと考へられるが故である。交換更に契約は主體相互の自由・平等を前提として初めて成立し得るのであり、而も交換・契約の經驗の進展と共に、原初的交換・契約に纏綿する團體乃至個人の偶然的恣意性が漸次捨象されて行き、遂に主體相互の自由・平等が對自的に歸結され、以て主體は相互に他者を共同的社會性の種的秩序から獨立なる純粹に私的なる自由平等の主體として承認し合ふ樣になる。ここに於いて之等私的個人を相互に結合關係せしめるのは、最早偶然的特殊性に纏綿される共同的社會性でもなく、又個體的恣意性を原理的に脫却出來ぬ日常的生活交渉でもなく、超共同體的超個體的なる普遍必然的實踐理性に外ならない。社會の共同體的なる慣習に制約される事なく、又自己の個體的恣意傾向性に規定される事なく、純粹に自己の普遍的內面から實踐理性的命法に從つて行爲する事が個人の當爲理想と考へられ、ここに自律的個人性更には人格性が確立されると信ぜられる。共同體的個體が卽自的に生活する共同體の人倫は、絕對の現成ではあるが單にその卽自的現成たるに止まり從つて決して永久不可侵のものではなくして、却つてその中に對自的に眞實に生きようとすれば幾多の矛盾を曝露し一義的規範性を喪失せざるを得ないものなるが故に、一度その共同的社會性から否定的に獨立せる私的個人の立場から對自的に批判され、批判を媒介としつつ高次の具體的人倫として建設されねばならない。又日常的個人がその中に無自覺的に生きる日常的社會の習俗も亦、一度び自覺的反省の對象とされる時、必ずしも充全なる人倫的意義を有せず却つて人倫に對する阻害で

すらある事を現示するであらうから、自覺的個人の立場より批判され高次の具體的人倫の契約に否定的に轉化されねばならない。斯の如き共同體的人倫や日常的習俗の否定卽肯定的批判の主體として實踐理性はその本質的機能を發揮するのであり、この限りに於いてそれは高次の具體的人倫の建設に對する否定的媒介者として必然的存立意義を持つ事は否定し難いであらう。然し斯樣に實踐理性は共同體的人倫或は日常的習俗の自己矛盾に基く自己否定の狀況に基底付けられて否定的に成立するものであるに拘らず、その成立基底を離れてその自律性の要求のみに由つて純粹に導かれつつそれ自身を純化する時、却つて實踐理性はそれが否定的に媒介す可き具體的內容を失つて抽象的形式に墮する外なくなるであらう。ここに我々は實踐理性自身の自己矛盾を見るのであり、從つてそれ自身の立場に止住する事が出來ぬと言はねばならぬ。從つて同時に又實踐理性に基いてその自律性を確立せる結合社會的私人も亦、絕對自己否定的に高次の在方に向上發展せねばならぬであらう。

實踐理性的自律個人が曝される抽象的形式性に頹落する可能性は、實は已に理論理性的自立個人に於いても見られるのであり、從つて一般に理性人にはこの頹落の可能性が不可避的に纏綿すると言はねばならぬ。勿論理論的・實踐的理性は共に學の組織・人倫の建設に對する否定的媒介者として必須不可缺の機能を發揮するものなるが故に、單純に否定し去らる可きものでない所ではなく、理性の自律を媒介としてのみ人間的生命の歷史的進步は可能であつた事を自覺すれば、理性的機能のより高度の發揮が要求されるに至る事は明白にして疑を容れない。然し人間的生命の歷史的發展進步——絕對現成態たる人倫の具體化が、單に理性的に自立的乃至自律的個人の機能に由るのみでなくして、同時にかかる機能とは樣式を異にする個人の行動に由つて、兩者相關的に遂行達成された事を我々は注意しなければ

ならぬ。理性的自立性乃至自律性は一般に勞働經驗に由り成立する自立的個人の內面的自覺を深化徹底する方向に確立されるものであつた。所が自立的個人性は單に內面への深化として機能し得るに止まらず、外物の征服支配として行動する事が出來る。この事は自立的個人性の成立を基底付ける勞働經驗の本性よりして當然の事と言はねばならぬ。勞働こそ生命の歷史的發展を基底付ける原動力であるが故に、勞働の主體たる時よく生命の發展を推進し得るであらう。然しその目的をより充全に實現し得るためには、直接無媒介的勞働ではなく、勞働經驗に否定的に基底付けられて成立した自律的理性の機能を媒介とする構想力に由つて發明される技術を使用せる、技術的勞働でなければならぬ事云ふ迄もない。勞働技術の持つ目的奉仕的合理性をその偶然的特殊的なる利用性より解放して論理的合理性の體系として組織する所に、理論理性の體系が成立ち、逆に理性體系の論理的合理性を媒介とする構想に由つて初めて新しき技術の發明は可能であり、新しき技術を媒介として勞働は發展進歩し、發展進歩せる勞働は更に理性體系の具體化的改變を要求する。理性・技術・勞働の三者は相互媒介的循環聯關を形成する。自立的個人性を、理性的作用を媒介としつつ特に勞働技術・技術的勞働との聯關に於いて具體的に發揮し、物・自然の技術的制作に於いて擴充せんとする時、人間は所謂制作人となり自立的個人性は制作的個人性として具體化されるのである。理性人の理性的個人性と制作人の制作的個人性とは方向的に相反しつつ內面的に聯關する。さて物と人との關係は同時に人と人との關係として現成するのが人間的現實の本質的構造である。物と人との制作的聯關は、同時に結合社會に於ける人と人との關係の基底として、社會關係的に主體化される。結合社會が一面私的所有意志を共通にする多數個人の結合集團である事は既述した所であるが、これを他面より見れば特定の勞働技術・技術的勞働の共同を基底として成立する社會存在な

りと言ふ事も出來るのではないか。かかる物と人との制作的聯關なき所に結合社會は具體的基底を以て成立する事が出來ない。特に結合社會が高度の國家性を實現す可き國家の構造契機に轉ぜられる時、結合社會は、多數個人の私的所有意志の共通性に由つてよりは寧ろ、勞働技術・技術的勞働の共同性を基底としつつ新しく組織編成される事が要求されるのではなからうか。この限り結合社會集團は正に職域團體と呼ばれるものとなり、これの構成主體たる個人の制作的個人性は職能と稱せられるものとなるであらう。

理性媒介的なる自立的個人性は右に述べた如く、種的生命衝動及びこれと融卽聯關する環境自然に對する勞働的對立否定卽肯定制作に卽して發動機能するのみに止まらない。前節に於いて詳論せる如く種的自然的生命は身心的生命として主體的に發展向上し、同時に多數個體の意識・心を制約强制する種的集團意識を成立せしめて、種的共同體を形成する。所が結合社會の自立的個人はこの種的共同體の集團意識乃至生活樣式に對して否定的に對立するものであるが、この主として勞働經驗の發展進步及び社會的現實の變轉動搖に基く實在的否定作用に卽して、理性は制作的個人性とは異つた仕方で發動機能するであらう。而して實踐理性が共同體的人倫乃至日常的習俗の自己矛盾を否定的機緣として、而も之等とは相反する方向に自律的個人性を純粹に深化徹底する極限に於いて成立するものであつたに對して、今考察せんとする自立的個人性は、大體同樣に一般に共同體の集團意識乃至生活樣式に否定的に機緣付けられながら、而もこれ等と相反する方向にではなく寧ろ云はば之等と同じ方向に或は之等の內部的變化を生ぜしめる樣な仕方で發動し機能するであらう。集團意識乃至生活樣式は、共同體の成員相互の身心的生活的交涉を成立せしめ、又この事と相卽して成員の共同體への內屬を支へる所の、共同の心的紐帶と言ふ可きものであつた。人間が心的存在

者たる限り心的紐帶の共同性を缺く人間の社會生活はあり得ず、これを媒介とせざる社會への內屬は偶然的であり個人の恣意を以て破綻せしめられ得るものである。結合社會の自立的個人も亦その生活・勞働に相應する如き心的紐帶を持つであらう。これが卽ち一般に集團意識乃至生活樣式そのものの一般化的否定卽肯定的に成立つ所の文化形式である。而して生活形式を文化形式へと否定卽肯定的に一般化するのが、正に外ならぬ特殊否定的＝普遍把捉的なる理性であり、文化形式を生活形式から區別する根本特徵はそれの理性的性格にある。生活形式が客觀的普遍妥當性を有せず、分化性・合理性・理知性を缺き、種的共同性を持つに止まるのに對して、文化形式は理性の一般化的否定卽肯定的作用により形成されるものとして、共同體の種的閉鎖性を超える所の客觀性を獲得し、分化的・合理的・理知的となり、普遍的に妥當する永久眞理的性格を帶びて來る。この構造上の區別と相關して、文化形式は生活形式と異つて、了解的でなく概念的であり、知行未分化的でなく知行の分化の上に立つて勝れて知的なる性格を持つものとなる。文化形式のかかる構造的乃至附帶的性格は、この中に機能する理論理性の自律性が高まる事と相關的に益〻純化徹底され、以て漸次それは生活形式的對話的人稱性を失つて獨語的・非人稱的となり、人間相互の心的・精神的紐帶たる機能を失つて、遂に社會的現實より疎外され人倫建設に對する意義を發揮し得ざるに至る事必然なりと言はねばならぬ。從つて若しそれが既に共同體の共同的生活より分立せる諸々の個人相互の超個人的共同紐帶としてより高き存在次元において人倫建設的意義を保持し續けんとすれば、理性自律の純化の方向を一方的に徹底するのみでなく、同時に寧ろこれとは反對の方向に卽ち人間的現實そのものの中に入り込み、集團意識乃至生活形式をより深き根源より媒介する具體的文化とならなければならない。然る時それは最早單なる文化形式と呼ばれるものではなくて、寧ろ人類的普遍

性を否定的に實現せる共同精神乃至民族文化と稱せらる可きものとなるであらう。共同精神乃至民族文化を形成する個的主體は、一方自律的に機能する理性の主體であると同時に、他方同胞との人倫的なる共同生活を誠實且つ眞摯に遂行せんとするものでなければならず、從つて當然彼は自己自身の中に相反對立する二つの方向を懷きつつ高次の自己同一を體現するものでなければならぬから、最早結合社會的なる勞働的・理性的自立個人たるに止まる事が出來ず、より高次の人間存在に次元飛躍的に發展向上せねばならぬであらう。文化的個人性は構造上結合社會的自立的個人性の最も具體的形態と云ふ可きであるが、同時にそれはこの自立的個人性が絶對自己否定的に自己を具體化した時、初めて眞に充實せるものとして建設されるのである。ここに於いても我々は結合社會乃至その構成員たる自立的個人がそれ自身の次元に停滯止住し得ざる內的必然性を具有する所以を看取するのである。

上來極めて不完全ながら考察論述せる所は、絶對——生命の哲學より把捉される限りに於ける、結合社會——自立的個人性の本質的構造であるが、今やこの本質的構造の對自化を俟つて、上來の論考に於いて卽自的に前提されて居た敎育的自覺もここに對自化され、以て兩者の相互媒介的聯關に於いて結合社會の敎育の敎育＝哲學的論考が具體的に展開さる可きである。結合社會の主體的樞軸たる自立的個人性こそ正に、結合社會の顯著なる特質たる歷史的發展進步の主體的推進力と言ふ可きものである。共同社會の種的個體性が、勞働經驗を通じて理性媒介的なる自立的個人性に發展向上する時、人間的生命は單に自然的基體的なる種的生命に止まらず、同時に歷史的主體的なる個的生命となり、從つて最早環境自然と直接に融卽滲透し合ふ事なく却つてこれに否定的に對立してこれを技術的に制作する主體となり、且つ又最早集團意識により不可抗的に規定制約される事なくこれより否定的に分立してこれを逆に主體的

に形成するものとなる。斯の如き人間個人と環境自然及び集團意識との否定的對立・分立を媒介とせる勞働的制作・主體的形成の關係を、逆の觀點より見れば、環境自然及び集團意識が人間個人に對して客觀的獨立性を獲得し、人間により制作・形成されながら同時に人間の制作・形成を客觀的に制約規定する客觀的實在となる事、卽ち人間により作られながら逆に人間を作るものとなる事を意味すると考へられる。而して斯樣に作られたものが作るものから客觀的に獨立して逆に作るものを作るといふ否定媒介的聯關の具體化に、人間的生命の歷史的發展進步の存在的・存在論的基底があるのである。自然的生命の次元に於いては、それが環境自然と直接に融卽滲透し合ふが故に、兩者の否定的對立がなく、單に生命の合目的的なる成長發達があるに止まる。次に身心的次元に成立つ共同體的生命に於いては、それと環境自然との卽自的對立があるに止まり、而もその對立が種的集團意識に由り新しい形態の融卽滲透の聯關の中に解消せしめられるが故に、そこには人間的生命の發展進步の可能性が開かれながら開かれると同時に閉されて了つて、具體的發展進步は遂に遂行されず、況んや主體的制作・形成更に建設の實現さる可き餘地はない。自立的個人性が確立される結合社會の勞働的・理性的次元に至つて初めて、人間的生命は歷史的發展進步を具體的に遂行し、勞働的制作・主體的形成を實現し、眞實の現實建設の基底をここに確立するのである。

自然的生命は渾然たる融一體として表象されるであらう。共同體的生命も實はこの渾然融一的自然生命の意識化的自己形成體に外ならない。兩者の間には存在次元の區別は存するが、それ等は距離的對立懸隔として表象し得ざる程に近接貫入して居る。然し歷史的主體的生命は最早自然的生命＝共同體的生命と直接に近接貫入せる形態に於いて表象するを許さぬ程に距離的對立間隔を持つ。初め自然的基體的なる種的生命より生れこれに否定的に基底付けられて

成立し、これとは毫釐の差を保持するに止まつた歴史的主體的なる個的生命は、やがてその歴史的發展進歩を通じて前者との距離を著しく引き離し天地も只ならぬ懸隔を生ずるに至つたのである。この距離懸隔こそ正に理性媒介的自立個人の勞働的制作・主體的形成の努力の賜であり、この努力を努力する者のみよくこの距離懸隔を埋め以て生命の歴史的主體的形成體の充全なる構成主體たる事が出來るのであつて、自然的基體的なる種的生命存在者たる個體の連續的合目的的なる成長のみに由つてはこの事は到底望み得可くもないであらう。所が人間は單なる種的生命存在者として生れ、共同體的生活における影響同化を通じて僅かにその共同的心性を育成陶冶されるに止まり、その限り歴史的主體的生命との天地の懸隔の前に佇むにすぎず、幾十世紀に亘る人間的生命の發展進歩を自らの力で追跡しその成果を習得し以てかの懸隔を埋め盡す事は到底不可能の業と言はねばならぬ。ここに於いてこの歴史的發展進歩の推進力たりし主體的力を種的個體に涵養育成し、これが成果の本質的精髄を集約して彼に教授傳達し、以て歴史的現實に於ける生命の自己形成體の充全なる構成主體たらしむ可く、彼を意圖的具案的に指導育成する事が不可避的に要求されるのである。ここに結合社會の教育が成立卽遂行さる可き必然的根據がある。これを逆の觀點より見れば、現在に於ける事實存在たる生命の歴史的主體的形成體が、それに對して抽象的と言ふ可き種的個體を、個的主體化的に自己自身に（對自的に）同化し組入せんとする所に、結合社會の教育が事實的に機能し卽行爲的に遂行されると言ふ事が出來る。而してこの時生命の主體的歴史的形成體を個的に代表してその同化組入の意志を主體的に體現するのが卽ち教育者であり、同化組入さる可き種的個體が卽ち被教育者たる事は更めて言ふ迄もない。

教育は教育者と被教育者との間主體的育成指導の聯關として行ぜられるものなるが故に、教育が行ぜられるために

は兩者の間主體的聯關を成立せしめる媒介者が要求される事は當然である。共同體の教育に於いてはこの媒介者と言はる可きものは人倫的融卽の生活そのものであり、從つてそれは教育者と被教育者から客觀的に獨立存在する如き第三者ではなくして、却つて兩者を主體的內面より全人的に媒介する所の客觀卽主體的具體者であり、ここにこそ正に人と人との關係としての共同體的教育の具體性があり又全人性がある。所が結合社會的個人はかかる融卽的人倫生活に對する否定的分立者として自立し來るものである以上、右の如き具體的且つ全人的なる間主體的聯關の媒介者を本來缺如するものと云ふ外ない。若し斯の如き事態が全面的に肯定される外なき事實なりとすれば、結合社會そのものに於いては眞に全人的且つ具體的なる教育は遂行され得ぬといふ歸結とならざるを得ないであらう。而もそれは屢〻否定し難い事實となつて居るのではないか。成程結合社會に於いても特定の教育が行はれる事は疑ない。然しそれは全人的具體的教育ではなくして單なる技術の授與であり所謂知識の切賣に過ぎない、といふ批判は屢〻聞かれる所である。而してそれが結合社會の本質的一側面に由來する不可避的なる一つの歸結なる事は、上論より明瞭である。この限り結合社會の教育は教育にして教育でない卽ちそれは教育の疎外態である、と言ふ事も出來なくはないであらう。とは言へ結合社會が人間的生命の歷史的發展進步の本質的基底であるとすれば、結合社會的なるものに關する教育を單に教育の疎外態に止まらしむる事なく、却つて本來的教育の內實的一契機に轉化する事が、教育そのものの具體化のためにも強く要求されると言はねばならぬ。結合社會的教育を人間の全人的具體的育成陶冶の本質的內實契機に如何にして轉ずるかが、特に今日の教育哲學に對する重大なる課題となつて居ると思はれる。

ここに於いては我々は謙つて結合社會的教育の疎外性に對する批判を吟味檢討せねばならぬ。成程この教育が已に

客觀的成體となれる技術の授與であり知識の切實である事は認めねばならぬであらう。然し注意す可き事は、技術や知識が客觀的成體として存立するに至る前に、それ等は實は人間により制作・形成されたものであり、人間の主體的活動を豫想する事なしには成體として客觀的に存立する事の出來ぬものであるといふ事である。從つて技術や知識は、その制作され形成される過程に還元する時、非主體的客觀的者でなくして實は主體卽客觀的者なのである。故に若し技術や知識を眞に教育的に教授傳達せんとすれば、單なる外物の如くに非主體的に客觀的に讓渡授與するが如き事は出來ないのであつて、却つて先人達が之等を制作・形成した時にはたらかしめた主體性、卽ち制作的個人性或は文化的個人性一般的に言つて具體的なる自立的個人性を、被教育者そのものの中に新しく機能發動せしめる事が要求されるはずである。かくして初めて先人達の努力に由り制作・形成され已に客觀的成體となれる技術・知識(文化)も眞に修得學習されるのであり、而して又客觀的成體の單なる受容的修得學習に止まらざる、新しき技術・文化の創造的なる制作・形成も被教育者に望み得られるものとなるのである。技術・文化の修得學習に自立的個人性の具體的なる機能發動が必然に要求される事を洞察する時、技術・文化の傳達教授が人間の全人的具體的育成陶冶と無關係であり、單に疎外的教育として遂行されるに止まる、といふ事は最早不可能なる事を我々は自覺せざるを得ないであらう。蓋し前述せる如く眞實且つ具體的なる自立的個人性は、常に人間個人の內面的自覺の深化と本質的に聯關し、又人倫的生活の眞摯且つ誠實なる遂行に於いて否定的に發揮されるものであり、從つて人間の全人的育成陶冶及び人倫の具體的建設組織に對し不可缺本質的契機をなすものなるが故である。結合社會の技術・文化の客觀的成體を貫く主體性たる自立的個人性の客觀卽主體的涵養陶冶といふ事を、不斷に顧慮し遂行する心構へを忘れざる時、初めて我々は技術・文

化の傳達教授を人間の具體的全人的教育に本質的役割を演ずるものとして語り又實行する事が出來るのである。

自立的個人性の勝れて客觀的な具體的涵養陶冶は、勞働技術・技術的勞働への教育として遂行されるであらう。勞働は上來再三述べた如く人間的生命の歴史的發展進歩の基底的推進たるものであるが故に、右の如き教育が自立的個人性の涵養陶冶に本質的役割を果す事は勿論であるが、歴史化されたる人間的生命は自立的個人性として個的に主體化されると共に、更に同時に結合社會的集團を形成するものであつた。而してかかる集團は高度の國家性を發揮す可き當來國家體制に於いては職域團體として組織され、これを構成する主體性は職能と言はる可きものであつた。從つてここに論考しつつある教育形態は同時に又、自立的個人の職能的な育成陶冶であり、且つ當然個人を職域團體に自立卽有機的に組入同化せんとする意義を持つものである。されば勞働技術・技術的勞働への教育の當來形態は、單に個人主義的自由主義的な餘韻を殘すと考へられる所の職業教育の名を以て呼ばるるよりも、寧ろ職業の國家的人倫的意義に對する自覺性を契機とする所の職能陶冶の名を付する方が一層事態に適合するのではないかと思ふ。職業——職能は個人の主觀的個性の內奥に囁く絶對の無媒介的直接召命であるよりも、寧ろ絶對の具體的現成態たる國家的人倫に對する種卽類的個人の義務卽使命と考へらる可きである。かくて初めて職能陶冶は個人の個性の自立性を尊重し承認すると共に、これの無媒介的なる絶對化に陷る事なく、同時に個性を社會存在と媒介し國家的人倫の中に具體化して、以て個性の主體卽客觀的育成陶冶の實を發揮する事が出來るであらう。生理的心理學の觀念せる如き抽象的主觀的個性を所謂生命形式として具體化した構造心理學の見地を更に具體化する事により、我々は生命形式を結合社會的生活形式として主體卽客觀化す可きであり、而もかゝる生活形式に於いて猶一方的に優勢な個人的主體性を社會存在更に

は國家現實と媒介し職能として具體化す可きである。然し職能としてその客觀性を一層具體化する事の中に不可避的に潜在する主體的個性無視の可能性を絶對否定して、これが自立性を保持するためには、自立的個人性は單に自立的たるに止まらず更に進んで自律性を否定的に體現する事が要求される。然し自律的個人性の育成陶冶は最早職能陶冶の域を脱すると云ふ可く、寧ろ次の高次なる基礎陶冶を俟つて初めて遂行され能ふであらう。

職能陶冶がその半面に於いて個人を同化組入せんとする職域團體は、猶特に物と人との勞働關係を基底とするものとして、未だ眞實の具體的人倫と言ふ事が出來ない。職能陶冶に由り職能的自立個人として育成陶冶される個人と個人とが、一方に於いて物との制作關係を通じて結合されると共に、更に進んで人間主體そのものとして相互に人倫的に連帶協同するに至る時、人倫はその具體性を一層高めるであらう。勿論人倫の卽且對自的建設組織は國家の政治的文化的建設組織を俟たねばならぬが、猶この段階に於ける教育も亦この建設組織に對する對自契機として遂行されねばならぬ。かかる教育は具體的には共同精神乃至民族文化への教育であると考へる事が出來るのではないか。共同精神乃至民族文化は、歷史の各段階に於いてその都度種的なる共同體より勞働經驗を通じて自立する諸個人の超個人的なる精神的紐帶として表現形成され、發展の各時期に於いて已に多かれ少かれ結合社會化されたる歷史的現實の精神的狀況の中に傳承發揮されて居るであらう。卽ち共同精神乃至民族文化は已に多少とも結合社會化され而も同時に民族的なる人倫に於ける自立的なる個人と個人との超個人的なる精神的紐帶である。されば個人はかかる共同精神乃至民族文化の主體的なる修得習熟に由つて、初めて協同的人倫の中に自律的主體的に生きる事が出來、人倫の建設組織にその主體性の內面より參與協力する事が出來るであらう。かかるものとしての限り共同精神乃至民族文化は單なる客觀的

成體として非主體的に學習獲得されるものではなく又かかるものとして頽落してはならず、却つて客觀的超個人的精神でありながら同時に個人の主體的精神と否定的に媒介されるものであり、從つて同胞との人倫的協同を眞摯且つ誠實に自律的主體的に生きんとする精神的努力を通じてのみよく修得され又自己化されるものでなければならぬ。かくて初めて、職域團體の組織の中に非主體的に固定され以て諸他團體の構成主體と否定的對立に陷り人倫を破綻せしめる可能性が、絶對否定的に否定されて、職能的諸個人が相反の可能性を持ちながら同時に却つて相互に協同し合ふといふ高次の人倫關係が確立されるのである。かかる超個人的紐帶たる共同精神乃至民族文化は、最早種的なる集團意識そのものではなく已に理性的一般を否定的に媒介するが故に、續(三)に述べた低次なる基礎陶冶を以てしては教育されるものでなく、却つてより高き陶冶類型を必然に要求すると言はねばならぬ。從つて我々は、一般に已に特定の理性的一般化を媒介して表現形成されたる共同精神乃至民族文化の修得習熟を目標とする陶冶類型を、初等教育の低次なる基礎陶冶と區別して特に高次の基礎陶冶と呼び度いと思ふ。高次の基礎陶冶を俟つて初めて個人は、一方理性的自律主體に深められると共に、同時に他方民族的人倫に組入同化され、かくして民族共同體の充全なる構成主體たる事が出來ると言はねばならぬ。

高次の基礎陶冶に由つて個人がそれの構造主體として勝れて主體的に陶冶組入される民族共同體と、職能陶冶に由つて個人がその構成主體として勝れて客觀的に育成組入される結合社會的職域團體とは、共に國家の本質的なる構成基底をなす。故に之等兩構成基底の構成主體として陶冶育成される所の個人は、この限りに於いて自己卽國家の聯關を主體卽客觀的に充實實現すると言ふ事が出來るであらう。然し民族共同體と結合社會とが合してそのまま直ちに具

體的國家現實となるのではなくして、實はより高次の精神的・人格的個人の政治的・文化的なる絶對自己否定的實踐に由る國家建設に於いて、兩者は國家的現實の具體的構成契機に轉ぜられるのである。されば未だ高次の精神的・人格的主體性が發揮されるに至らず・又國家の勝義の國家性が猶具體的に建設組織される事のなき此の存在階層に於いては、兩契機が絶對媒介的に綜合統一される事はあり得ぬと云ふ可きである。然し若し之等兩基底契機更に又兩者の主體的樞軸たる共同精神と職能的個人性とが、全然何等の主體卽客觀的聯關をも形成せずして各個獨立に並存するとすれば、具體的人間の育成陶冶は遂に望み得可くもないであらう。然し同時に國家の勝義なる國家性と相關する精神的・人格的主體性も充全なる意味に於いては成立せぬのである。從つて兩契機は一般に未だ充全なる精神的・人格的主體に發達向上する事なき青年の若き主體性の中に無媒介的融一聯關を形成し、直接的卽自的統一をなすものとして云ふ可くんば心情的に提へられるに止まると考へらる可きではないか。然し共同體的なるものと結合社會的なるものとは本來相反對立するものなるが故に、兩者の心情的なる無媒介的把捉の裏が直ちに分裂對立なる事は容易に推測される所である。かかる事情は青年の心情の中に於ける共同體的心性と自立的個人性との矛盾葛藤に於いて極めて顯著に現はれるのではないか。青年は或る時は兩者を矛盾なく調和的に主體化して居るかの如き柔軟な若々しい主體性を發揮し、而も直ちに孰れか一者のみを一方的に頑固に强調發現して調和を缺く矛盾行動を敢行する。ここに青年心理學に於いて青年の傾向性の無政府狀態と言はれる事實の一顯現を見る事が出來る。ここに青年と共に生きるといふ事なくしては眞實の內面より同感し難い青年特有の心理があり精神がある。然し青年の傾向的無政府狀態も自立的個人性の職能的個人性への客觀化と更にそれの自律的個人性の主體化とを俟つて、やがて共同體的者と結合社會的者

絶對媒介に轉化するであらうし又轉化せねばならない。兩者媒介統一の餘りにも早き完成を焦り求めて青年の柔軟な若々しき主體性を老人化し固型化してはならない。青年の主體性に固有なる生々潑剌は飽く迄尊重し大切に育成助長しなければならぬ。然し同時にその主體性を無政府狀態的放肆に放置してはならぬ。青年の自立的個人性は職能的個人性に客觀化され自律的個人性に主體化さる可く育成陶冶し、以て放肆なる主體性の裏にともすれば巣喰ふ墮落への可能から青年の若き心理・精神を救はねばならぬ。然し職能的個人性と自律的個人性とが絶對媒介的に綜合されるのはこの階程に於いては猶不可能なのであつて、青年の充全なる精神的・人格的主體への心理的精神的發達向上を俟たねばならぬ。青年の教育は完成的たると共に未完成的なのである。我々は更に高次の現實、及びこゝに遂行される高次の教育に高まる事を要求される。（未完）

（二六〇一・一・廿八）

〔前號正誤〕

（誤）	（正）
六四頁ノ三行目——として撥無せられ——と共に撥無せられ	
七三頁ノ二行目——形相的に規則ずる——形相的に規制する	
八六頁ノ五行目——最初の形體在方——最初の形態在方	
八八頁ノ十一行目——不完全なる覺悟——不完全なるを覺悟	